interview

『ソウル・アートガイド』編集長
キム・ダルチンさんに聞く

ソウルのミュージアム事情

その国の文化に触れるにはミュージアムに行くのが一番と、キム・ダルチンさんは言います。今、韓国のアートシーンはとってもホット。ミュージアムを通じて、新たな韓国発見の旅に出かけてみませんか？

文 —— 稲葉真以　撮影 —— Lee chung min（BAoBAb studio）

韓国美術の情報を満載したガイドブック

「外国に行ったら、まずミュージアムに行くといいでしょう。美術館や博物館に行けば、その国の歴史や文化に直接ふれることができるから」と語るのは、『ソウル・アートガイド』編集長のキム・ダルチンさん。

『ソウル・アートガイド』は、ソウル市内の主要な美術館やギャラリーに関する情報が、すべてと言っていいほど掲載されているガイドブック。これなしでソウル市内に点在する美術館やギャラリーを見てまわるのはとうてい無理！と言っても過言ではありません。

「新聞や美術雑誌の情報欄は十分なスペースがなく、アーティストが展覧会の情報をより広く、より多くの人びとに知らせるには限界があります。展覧会だけでなく、幅広い美術情報を伝えるためのいい媒体がないだろうかと考えたんです」。キューレーターとして約20年間に渡って現場で培った知識やノウハウを活かし、キム・ダルチンさんが『ソウル・アートガイド』を創刊したのは02年。当初はA2大の紙を六ツ折にしたシンプルなものでしたが、徐々に内容を充実させて、現在は138ページにも及ぶ立派なガイドブックになりました。

展覧会の情報はもちろんのこと、緻密で正確なマップをはじめ、第一線で活躍する評論家によるコラム、海外のアート情報、さらにはアート関連の新刊本の紹介まで、韓国美術全般に関する情報が満載されています。何よりも写真がとってもきれい。フリーペーパーなのに、そのクオリティは美術専門誌にも引けをとりません。基本的にハングルで書かれていますが、英語リーダーのために、作家の名前と展覧会名はできるだけ英語で表示しています。

ずらりと並んだ書架に美術関連の書籍や雑誌がぎっしり。まるで図書館のようです。

ミュージアムの歴史

キム・ダルチンさんによると、韓国のミュージアム史の始まりは20世紀初頭にさかのぼります。「1908年に昌徳宮の中に開館した李王家博物館が、韓国初の博物館と言えるでしょう。李王家博物館はその後、1938年に徳寿宮にある石造殿に移され、正式に開館しますが、当時は李王家の所蔵品である古美術や文化財が展示されていたようです」

いわゆる「近代美術」が韓国に導入されたのは1910年代以降で、当時はまだまだ美術展の開催は決して多くありませんでした。やがて1922年に朝鮮総督府が主催する公募展『朝鮮美術展覧会（鮮展）』が始まります。『鮮展』は当

時、日本政府による植民地政策の一環として開催されたものですが、韓国内および日本や西洋に留学した作家たちの登竜門でもあり、韓国唯一の官展として1944年まで続きました。朝鮮総督府で開催されていた『鮮展』には日本人も出品していたのに対し、韓国人だけによる『書画協会展』は、主に学校の講堂などを会場に開催されていたそうです。

「1969年に国立現代美術館が景福宮の敷地内に開館し、これが本格的な美術館の始まりです。その後72年に徳寿宮の石造殿へ移され、さらに86年に果川に移転し現在に至ります。国立の美術館はこの現代美術館のみですが、90年代からは光州や釜山をはじめとする地方都市にも、公立の美術館が開館し始めました」

多様化する韓国美術

80年代後半から90年代にかけて、美術館やギャラリーが次々と登場します。文化の中心地ソウルらしく、仁寺洞をはじめ司諫洞や光化門周辺など、大小さまざまなギャラリーが集中する地域が点在しています。それぞれに特徴があり、古美術や東洋画から現代美術まで、展示内容は多種多様。展覧会をめぐり歩いていると、韓国は日本に比べて現代美術に開かれている印象を受けます。現代美術の展示自体が多いのもそうですが、空間を活かした大胆かつ洗練されたディスプレイを見ると、難解に思われがちな現代美術が親しみやすく感じられるのが不思議です。

「韓国の現代美術は、例えば70年代のモノクローム派や80年代の民衆美術、90年代のモダニズムの復活などに代表される、時代ごとの流れがありましたが、現在は非常に多様化してきていると言えます。脱ジャンル、脱媒体の時代ですね」とキム・ダルチンさんは分析します。現在の韓国アートシーンの多様性と潜在力が、そのまま『ソウル・アートガイド』の内容の豊富さに反映されているようです。

アートと人が近い韓国

韓国の美術館では親子連れの姿を良く見かけます。子どもたちが自由に鑑賞しているのを見ると、日本に比べて開放的な感じがするので尋ねてみると「楽しんで見るのはいいのですが、美術鑑賞のマナーに関してはもう少し勉強する必要がありますね(笑)」とちょっぴり苦笑い。「ただ、韓国の人びとは非常に教育熱心なので、休日になると親が子どもを連れて美術館や博物館を訪れることは多いですね。特に博物館に行けば教科書に載っている文化財の本物に触れることができますから、とてもいい勉強になるんです」

パブリックアートに力を注いでいる韓国では、アートを通じたコミュニケーションを充実させるために、さまざまな試みが行われています。家族連れで気軽に美術館を訪れる人が多いのもそういった活動の成果なのかもしれませ

仁寺洞や司諫洞などのギャラリーに、必ずと言っていいほど置いてあるフリーペーパー、月刊『ソウル・アートガイド』。まずはこれを手に入れることから始めましょう。

キム・ダルチン(金達鎮)

1955年生れ。中央大学芸術大学院卒業後、国立現代美術館学芸員、ガーナアートセンター学芸室長を経て、現在キム・ダルチン美術研究所所長。『ソウル・アートガイド』の編集のほか、美術・工芸など多方面にわたる執筆で活躍中。韓国美術のエキスパート。